

---

**こんな終わり方も、あってもいいよね。**

ほむほむ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

こんな終わり方も、あってもいいよね。

### 【Nコード】

N4300S

### 【作者名】

ほむほむ

### 【あらすじ】

ハッピーでバッドなエンド。そんな話を書きたかった。

辺り一面廃墟と化した街。そこらじゅうに横たわっている死体。首から上が無い者、上半身と下半身が別れた者、様々な死体がある。そしてそれらの頭上には　ワルプルギスの夜。そいつは悠然と宙に浮いている。

ここはワルプルギスの夜の結界の中。外の世界にはまだ影響はないが、そのうち外もこのこと同じような光景と化すのは想像に難くない。

そんなこと絶対にあつてはならない、そしてそれを阻止できるのは私たち、魔法少女だけ。

何度となく繰り返してきた時間の中で、その繰り返した数だけあいつに敗れてきた。まどかとの約束を果たすことも出来ずに……

そんな私が何百、何千と繰り返してきて倒すことのできなかつた敵を倒す、これは不可能に近い。　いや、倒すことは簡単なのだ。まどかが魔法少女になり、あいつに一発当てるだけで勝てる。勝てるが、それではいけない。私はまどかと約束したから。

まどかを魔法少女にさせない。これが私の唯一の友達であるまどかとの約束で、私が絶対に守らなくてはいけない約束だから。

だから私はそいつに何度も敗れてきた。私程度の力でそいつを倒すのは不可能とわかっていながら、挑み、敗れた。

だけど、そんな繰り返ししも今回でおしまいだ。私には、まどかを魔法少女にさせずにやつを倒せる自信がある。

私の隣りには、佐倉杏子、美樹さやか、巴マミ。

いままで繰り返してきた中で、一度もなかつた　彼女たち全員がワルプルギスの夜を迎えるという、奇跡に近い現象が起こっている。

彼女たちと私、四人がいれば、あいつも倒せるだろう。今回失敗したら、おそらく二度目はないだろう。絶対に失敗は許されない。

「あなたたち、準備はいいかしら」

「ああ、いつでもいいぜ。パーっと暴れてやるっじゃんっ」

「いっちょやりますか！ 杏子、足手まといにはなんないですよ？」

「わたしも準備はできているわ」

私の言葉に返す三人。その声質は強大な敵を前にしているというのに明るい。

本当に奇跡のようだと思う。

魔法少女の真実を知り絶望した美樹さやかは、一度は魔女になりかけたが、佐倉杏子のおかげで魔女にはならなかった。

バマミは、元々のポテンシャルと経験から危機を乗り越え、佐倉杏子も同様に危機を乗り越えた。

絶対に負ける訳がない。根拠なんてものはないが、負けるなんてことはないと思えることができる。彼女たちも私と同じ考えだろう。

「みんな……」

私たちの後ろでまどかが心配そうな声を出す。彼女の足元にはインキュベーターがこちらを見ながら座っている。まどかにはついてくるなど何度も言い聞かせたのだが、彼女は頑としてついてきた。

だが、それもまどからしい。

「鹿目まどか。あなたはそこで見ていていい。そのキュウベえと契約する必要はないわ」

「そうだぞまどか。あたしたちにかかればあんなのちよちよいのちよいだからさ、そこで安心して見ていないさい！」

「うん……」

インキュベーターは何も言葉を発さず、ずっと私の顔を見つめている。何を思っただ私を見ているのかわからないけれど、あなたの負けよ、インキュベーター。

「いくわよ」

## 1 (後書き)

とりあえずエンドを書きたかった。

自分としてはそのうち最初から書きたいなと思っただけだね。

ほむほむかっこいいよお。

一番好きなのはマミさんですけどね！

そして二、三話で完結します。

暁美ほむらの言葉で、彼女たち四人は一斉にワルプルギスの夜へと翔んで行く。

暁美ほむらは爆弾や機関銃を駆使し、佐倉杏子は槍で相手をけん制しつつ攻撃し、美樹さやかは剣で斬りつけ投擲し、バママはマスケット銃で援護をしている。

ワルプルギスの夜は、そんな彼女たちに照準が定まらずなかなか攻撃が当たらない。このままいけば勝てるか誰の目からでも見えるだろう。

「みんな……」

しかしそう見えても不安がなくなるわけではない。鹿目まどかはそんな戦闘を見て不安そうな声を出した。

「まどか。ボクと契約したければいつでも言っただけ。あれにまどかが加われば勝てるんだから」

鹿目まどかの足元から聞こえてくる声の主は、キュウベえ。彼女たちを魔法少女にした張本人だ。どんな願いも一つ叶える代わりに魔女と死ぬまで戦う運命を負わされる。そういう契約でキュウベえは少女を魔法少女にするのだ。

魔女は人々に災厄を振りまく悪者だ。魔法少女はその魔女を倒すために存在している。

悪者を倒し、人々を影から護る。端から見ればそれは正義の味方に見えるだろう。それは鹿目まどかにもそう見えていた。

だから鹿目まどかも魔法少女になりたいと願った。不器用でなんにもできないわたしだけど、魔法少女になれば人を救うことができる。キュウベえの言うとおり、わたしにすごい才能があるのだとしたら、それはきっと素晴らしいことなんじゃないか。

鹿目まどかには叶えたい奇跡なんてものはなかった。ただ純粹にみんなを護りたい、それだけで魔法少女になろうとした。

奇跡を捨ててまで魔法少女になろうとするなんて、なんのための契約か、一般人に理解はできないだろう。理解できなくとも良い。そうしたいと思えるのが鹿目まどかだったのだ。

「……ううん、契約はしないよ。わたしはみんなを信じているから」  
「……そうかい」

だがそう思っていないながらも、ここまでキュウベえと契約はしてこなかった。

理由の一つは、人を護りたいから魔法少女になりたくても、契約には願いが必要なのだ。しかし鹿目まどかには願いがなかった。そのため契約は遅れた。

二つ目は、魔法少女の裏を知ってしまったから。キュウベえの口から明かされた魔法少女の秘密。魔法少女はやがて魔女になる。これは絶対に変えられない運命だと言われた。

そしてそれがキュウベえの言うとおりならば、自分が最強の魔法少女になり、やがて魔女になる、ということは最悪の魔女になってしまうということでもあるのだ。

キュウベえの口から自分は宇宙をも凌駕する力を持っているらしく、そうだとするならば魔女になった時には地球が滅亡してしまうのではないか。

そんなこと優しい鹿目まどかには許容できるわけがない。この力でみんなを救いたい、魔女になってみんなを苦しめたくない。

そんな思いが交差して、決断できなかった。そして今でも答えは出していない。

彼女たちを戦わせて、自分は後ろで立っているだけでいいのだろうか。キュウベえはああは言っているが、もしかしたら魔女にならない方法もあるんじゃないだろうか。

そしてなにより、彼女たちが傷つくのを見たくない。

今すぐにもキュウベえと契約して助けに行きたい。だけど、彼女たちからは契約はしなくてもいいと、してはいけないと言われているのでそれできない。

鹿目まどかは、そんな想いを胸に抱きながらただ戦闘を見るしかなかった。

そしてやはり、ワルプルギスの夜は強力だった。

「さやかちゃんー！」

ワルプルギスの夜は最初は彼女たちに翻弄されてはいたが、徐々に体制を立て直していた。当たっていた攻撃も防がれるようになり、逆にワルプルギスの夜の攻撃が彼女たちに当たるようになっていた。そしてワルプルギスの夜の攻撃はとうとう美樹さやかの腹を貫いた。その攻撃によって、美樹さやかの腹は半分ほど抉り取られ、地へ落ちていく。声は聞こえないが、戦っている彼女たちも美樹さやかに向けて何か叫んでいる。

鹿目まどかはその様子を見て、美樹さやかの名前を叫んだ。

「大丈夫だよまどか。いまはもう行動不能になってしまったけれど、さやかの治癒能力なら死ぬことはないよ」

魔法少女は、魔力によって身体を治癒することができる。美樹さやかに当たった攻撃は、魔法少女でさえも致命傷になりえるものであったが、彼女の魔法特性は『治癒』。治癒の特性を持つ彼女ならば、戦闘には復帰できないが死ぬことはないだろう。それを聞いて鹿目まどかは安心した。

しかし死ぬことはなくても、美樹さやかの脱落は彼女たちにとってもものすごい損害となった。連携を取るのが難しくなりワルプルギスの夜の攻撃は熾烈を極めた。

そして彼女たちはやがてそれに耐えられなくなり、脱落者を増やす。美樹さやかの次は佐倉杏子、その次はバママミ。彼女たちは致命傷こそ避けたものの、この戦闘に復帰は難しいだろう。

残るは暁美ほむらただ一人。戦況は絶望的である。

「なんで……なんでなの………ねえキュウベえなんでなの………」  
鹿目まどかは、次々と倒れていく友達を見ながらそう呟くことしかできなかった。

「はあ……。まどか、彼女たちにワルプルギス夜を倒せるわけがな

「いじゃないか」

「　　なんで!?　　なんで言ってくれなかったの!?!」

鹿目まどかはキュウベエのそんな言葉を聞いて驚愕した。

「だって訊かれなかったからさ。それに彼女たちは勝てるって信じていたみたいだし、そこでボクが勝てるわけがないと言ってても信じてもらえないだろうしね。……………それに、ボクは君に言っただじやないか、まどかがボクと契約してくればワルプルギスの夜を倒せるって。そして、まどかは魔法少女にならないんだろう?　　だったら彼女たちに戦わせるしかないよ」

「　　そんなの……………そんなのあんまりだよ……………」

鹿目まどかはその言葉を聞いて涙を流した。目線の先ではいまだに暁美ほむらが一人で戦闘をしている。そしてその姿は満身創痍で、あと少しもすれば彼女も地へと落ちるだろう。

「……………さあまどか。もう一度訊くけど、ボクと契約する気はあるかい?」

「……………　　ねえキュウベエ?　　わたしが魔法少女になれば、あれを倒せるんだよね?」

数瞬経った後、鹿目まどかはキュウベエにそう訊いた。目はワルプルギスの夜へと向けながら。

「　　そうさ!　　まどかのありったけの魔力を使えばあんなのすぐに倒せるよ!　　さあまどか、契約するなら今しかないよ!　　あのままでは暁美ほむらは死んでしまう」

「……………　　キュウベエ、わたし、みんなを助きたい。救える力を持っているの!　　ここでのんきに見ているなんて……………。友達が死んじゃうなんて嫌だし、ママやパパ、そして街のみんなが死んじゃうのも嫌だ。救えるならわたし……………。　　キュウベエ、わたしは力がほしい。あの魔女よりも、どの魔女よりも強い力がほしい」

「　　まどか、君もやがて魔女になるんだよ?　　いいのかい?」

「　　ううん、よくないよ。私が魔女になりそうになったら自分でケリをつけるから」

そう言つてキュウベえへと顔を向けた鹿目まどかの眼は、赤く腫れていながらも決意ができた、軽い気持ちで決断したものではない、そんな眼であつた。

「……君のその願いは叶えることができる。本当は無理なんだけど、まどかは特別だからね。それでまどか、しつこいようだけど本当にいいのかい？ 彼女たちの言葉に背いて」

「うん。いいの。たぶんいっぱい怒られると思うけど……だからね？ 私を魔法少女にして」

「わかつたよ。契約成立だ、まどか」

「だめ！ まどかあああー！」

遠くの方から鹿目まどかを呼ぶ曉美ほむらの声が聞こえてくる。

「ごめんね。ほむらちゃん、みんな……」

そう謝罪を述べた鹿目まどかの体は、光に包まれた。

結局、護ることはできなかつたのか。

四人そろつても、ワルプルギスの夜は倒せない。確かに、私一人で戦うより弱らせることができた。だがそれだけだつた。

キュウベえが何も言わず私を見ていたのは、こうなることがわかつていたからなのか。そんなこと今わかつてしまつても、どうしようもない。

絶望感を感じない、ただあるのは虚無感だけだ。呆然とまどかが光に包まれるのを見ていることしかできない。全身の力が抜けていくのがわかる。元より脆弱な身体、魔力で強化しているとはいえ、その魔力も残り少ない今となつては意味を成さない。

予備のグリーンフシードはまだある。地に倒れている彼女たちのおかげで、消費を抑えることができた。

だが、ソウルジエムにかぎさうという気力さえおきない。結局なにをやっても倒せないということがわかつてしまつたから。まどかを護ることは不可能ということがわかつてしまつたから。

そんな私がもう生きている意味なんてないだろう。ここで魔女になつて、まどかに討たれる。

思えば、私は人を殺しすぎた。まどかの友達も、一般人も。使い魔を魔女にさせるために見殺しにした人間も含めれば、それはもう馬鹿らしくなるくらいの人間を殺してきた。

人殺しは幸せにはなれない、という言葉がある。まさにその通りだと思う。

まどかのため、と思つて人を殺してきた。私は罪の意識に押しつぶされないように、まどかのためという正義という名のもとによそ見していただけだつた。まどかを護ると言っておきながら、結局はそういつところでもまどかに護られていたというわけだ。

最初から最後まで護られていた。それがとても嬉しくて、とても

悔しい。まどかに何一つしてやれなかった。傲慢な考えだが、それだけが心残りだ。

ビルまるごと一つが、ワルプルギスの夜によって私へ打ち出される。私にはそれを避けることも、防ぐこともできない。甘んじて受け入れよう。

おそらくこれが当たれば私は死ぬだろう。だがそれでいい。私がないほうが、みんな幸せになれる。それにもうまどかの泣く顔を見たくない。

ただ最後に。

私は、まどかと友達になれて幸せだった

### 3 (後書き)

すんげえ短いけど許して

目を瞑り、これからくるであろう衝撃に身を任せる体制に入る。直後に何かが爆発するような音が響き、私の体は吹き飛ばされる。痛みは感じない。なぜなら痛みを感じないように制御しているからだ。

私がこれまでしてきたことを垣間見れば、本当は痛みを感じさせないようにするなんていけないことなんだと思う。だけど私も死ぬのは怖い。人殺しは何を言っているのかと言われるかもしれないが死ぬのは怖いのだ。だからせめて温い考えかもしれないけれど、痛みを感じずに死にたい。

そんなことを吹き飛ばされながら考える。どうやら即死ではなかったようだ。意識もある。

そして吹き飛ばされること少し、ようやく壁に当たったようだ。その壁は、やわらかくてあたたかい、そして心が穏やかになるような、そんな壁だった。

もしかしたらこれが死後の世界なのかも知れない。私は天国や地獄なんていう死後の世界なんてものは信じていなかったけれど、もしこれがそうなのだとしたら、そういうものも信じてもいいのかもしれない。

「ほむらちゃん」

私の大事な人　まどかの声が聞こえる。

私はまどかに謝っても謝り切れない。まどかはいつも私に優しくしてくれたし、助けてくれた。

なのに私がまどかにしたことといえば、傷つけることだけ。ひどいことをたくさん言っただし、ある時はまどかの目の前でまどかの友達を手にかけてこともある。

決して私はまどかが嫌いなわけではない。むしろ私の頭の大部分を占めるのがまどかだ。

だからこそ、私にはそうすることしかできなかった。言い訳にか聞こえないけれど、そうすることしかできなかった……

まどかに、みんなと仲良くしようよ、と言われたとき、私がどれだけそうしたかったか。だけどそうしてしまうと、さらにまどかを悲しませることがわかっていからできなかった。

「ほむらちゃん」

まどかのその声がとても心地よい。まるで子守唄のようだ。

「ほむらちゃん」

まどか、ありがとう。もういい、私はもう十分だ。まどかにはワルプルギスの夜、そしてこの後魔女になる私を倒して終わりにしてほしい。

一時凌ぎにしかならないと思うけれど、私が持っているグリーンフシードをまどかに渡そう。それがあればとりあえず今は誰も悲しまない。

「ごめんなさい。許してほしいとは言わないけれど、どうか私のことを忘れないでほしい。結局約束は果たせなかったけれど、私がやってきたことを無にしないように、まどかには私のことを覚えていてほしい。それだけで私がいた証拠になるから。」

「ほむらちゃん」

私はさっきまで聞こえていたまどかの声は、死後の世界か、あるいは走馬灯のようなものかと思っていたが、まどかが私を呼ぶ声が止まないことに疑問を持った。

今気づいたが、私が体を預けている壁、震えている気がする。

「ほむらちゃん!!」

「……………まどか……………?」

疑問に思った私は、瞑っていた目を開けてみた。あれだけの攻撃を受けたというのに、体は動く。

そして目を開けたそこには　まどかがいた。

「ほむらちゃん!! ……よかった……………」

「……………どう、して……………?」

現状に頭が追いつかない。

「どうしてって……あのままだったらほむらちゃんが死んじゃうと思っただよ！」

「私は……あなたにたくさんひどいことをしたのに……」

「ううん……。わたしはね、ほむらちゃんが優しい人って知ってるよ？ 今までわたしに言ってくれたことは、わたしのための想つてのことだったんだよね？ さやかちゃんやマミさんにもいろいろきついこと言ってたけど、なんだかんだ助けてくれたし。むしろわたしが謝らなくちゃいけないよ。ほむらちゃんの忠告に背いてキュウベえと契約しちゃった」

「いいの……もう、いいの。それよりも早くワルプルギスの夜を」  
「……うん」

まどかを責めることなんてできない。私では結局倒すこともできないし、それにまどかが魔法少女にならなければ、この街は消滅していただろう。

それはわかっている。わかっているけれど、私はこれからどうすればいいのだろう。

ワルプルギスの夜の夜が終わり、まどかが魔女になり死んでしまえばまた私は時間を遡る。そしてあの病室で目を覚ますだろう。

けれど、もうまどか抜きではワルプルギスの夜を倒すことなどできないことがわかってしまった。

ソウルジェムは、絶望やストレスなどの負の感情によって穢れていく。いままでは、まどかとの約束を果たすためだと、希望を持ってやってこれた。

しかし、それは叶わないことだと知ってしまった。あとはただ魔女になるのを待つだけしかない。そしてそれは今じゃなくとも、すぐに訪れるだろう。

まどかがワルプルギスの夜に向かって弓を番える。

その姿は、私が初めてまどかの魔法少女姿を見たときを思い出させる。

あの時は何も知らず、まどかのその姿がとてもかつこよく見えた。子供のころよく見ていたアニメの主人公のようだと思った。

矢を放つまどかの姿や、敵の攻撃を避けるまどかの一挙一動に興奮したし、大人気なくはしゃいでいたと思う。そして、希望に溢れていた。

それが今では、魔法少女の真実を知り、厳しさを知り、呪った。だけど、まどかとの約束というただひとつの希望を胸に諦めずやってきた。

だけど、その希望も打ち砕かれた。

弓に番えた矢の輝きが増していく。その輝きは、今までに見たこともないような輝きだ。まどかがインキュベーターに何を願ったかは知らない。だけどその願いは、私やバマミたちでは叶えられないほど大きなものなのだとわかる。

おそらくいままでのまどかよりもここにいるまどかは、最強だろう。そして最悪の魔女になるだろう。

まどかがそんなことを許すわけがない。おそらく、まどかは魔女になりそうになったときは自殺するつもりなのだろう。

今は私がグリーンフィードを持っているからすぐに魔女になるというわけではない。だけどそう遠くない未来、まどかは魔女になる。そしてまどかが死んだ瞬間、私はまた時間をやり直す。私はもう時間を戻す意味を見出せなくなったから、病室で目を覚ました瞬間魔女になるかもしれない。

いやだ。死ぬのもいやだし、まどかとの約束を果たせないのもいやだ。そして、覆すことができないのもいやだ。

「まどか……ごめんなさい……！」

私は矢を放つまどかを見て、そう言うことしかできなかった。

#### 4 (後書き)

忙しすぎてなんにもできない。  
そんなの絶対、おかしいよ。

まどかの放った矢がワルプルギスの夜へと一直線に向かっていく。矢がワルプルギスの夜に近づくにつれて、強かった輝きがさらに強くなっていき、ワルプルギスの夜にたどり着くころには目を開けていられないほどの輝きになった。

私とその輝きに目を当てられず瞑っている間、これはワルプルギスの夜の断末魔なのか、泣いているのか、それとも喜んでいるのか、ただの悲鳴にも聞こえるワルプルギスの夜の声のようによくわからない音が響き、輝きが収まるころには、廃墟だけを残してワルプルギスの夜の姿は無くなっていった。

……すごい。私たち四人が太刀打ちできなかった相手が、たったの一発で、今までに見たこともない圧倒的火力でまどかはワルプルギスの夜を打ち倒した。

まどかはいつも、自分は不器用だ、何にもできないなどと言っているけれど、そんなのとてもないと私はずっと思っている。

たしかに、まどかには日常生活においては突出したものはないかもしれない。けれど、人を思いやる気持ちは誰よりも尊いものだし、なにより誰にもできないこと　まどかの力で世界中の人を救うことができる。

誰もが一度は夢見るだろう、自分がヒーローになって人々を救う。私たちが全員そう思うかはわからないけれど、男は何かしら強い自分が悪者を倒し、人々を救うその姿を妄想なりするだろう。

しかし普通に生活し時間がたてば、それらは過去の恥ずかしい思い出として封印し、そして未だにそんなことを妄想している者を笑いのものにする。そして、自分を犠牲にして人を救うなど愚かだと思ってしまうようになっていく。

そんな誰にもできないことをまどかはできるのだ。人々に希望を与えることができる。それは笑うものでないし、とてもすばらしい

ものだ。

しかし、そうは思っても私は素直に喜ぶことはできない。

私はまどかと違って人々を救おうなんて思っていない。私はまどかとの出会いをやり直すために魔法少女になり、そしてまどかを魔法少女にさせないという目的に変わった。

たしかに、魔法少女になった当初はこの力で人々を救うのだと意気込んでいた。けれど、そんな意気込みは次第に消沈していき、そしてまどかの邪魔になる人間を殺すのも、無害な一般人を殺すのも厭わなくなっていた。

だから私はすばらしいとは思いつけれど、喜ぶことはできないし、逆に、最初からまどかが力を持っていなければよかったのに、そこらへんの女子中学生でよかったのに　まどかがいなければ何万人も死んでしまふとはわかっていながらも、そんないけないことを思ってしまう。

「まどか！」

ワルプルギスの夜の消滅を確認した直後、矢を放った姿勢のまま立っていたまどかが糸の切れた人形のように倒れたのを見て、私はまどかに駆け寄り、地面に体を打ち付けてしまわないように支える。

「ほむら、ちゃん……ごめんね」

「喋らなくていいから！」

まどかは私の顔を見ると、心の底からそう思っているのだろう、申し訳なさそうな顔で私に謝ってきた。そして苦しそうな顔にすぐ変わった。

ワルプルギスの夜を一撃で倒すほどの魔力を使ったのだ。まどかの全魔力を使ったのだということはわかる。

ということは、まどかが魔女に今すぐなってもおかしくない状態ということだ。その証拠としてまどかのソウルジェムは黒よりも黒いというくらいに穢れている。

まどかを叱るのは今じゃなくてもいい。そしてそれは私の役でも

ない。

「いますぐグリーンフィードを……！」

私はすぐさま予備のグリーンフィードをまどかのソウルジエムにかざした。

「……え……？」

私はグリーンフィードを限界まで使ってまどかのソウルジエムに当たらずだ。現に、グリーンフィードは限界に近い。なのになぜ

「　　なんでまったくソウルジエムが浄化されない……！？？」

まどかのソウルジエムがまったく浄化されない。

グリーンフィードは通常、魔法少女の魔力量にもよるが、ソウルジエムの穢れを三回ほど浄化できる。それならばまどかの魔力量が規格外だとしても、ひとつかふたつのグリーンフィードを使えば完全とは言わないまでも、ある程度は浄化できると思っていた。

しかし、グリーンフィードを一つ使ったのに、まどかのソウルジエムに変化はない。使う前と同じ、黒よりも黒、というくらいに穢れている。

「まどか、やだ、まどか……！」

「ほむ、ら、ちゃん……！」

私はもう二つ残っていたグリーンフィードをまどかのソウルジエムにあてがう。しかしそれでもまったく変わらず、まどかのソウルジエムは穢れたままだ。これでは、まどかが死んでしまう……！！

「曉美ほむら。たかが三つのグリーンフィードじゃ鹿目まどかの穢れを浄化することはできないよ」

「……インキュベーター……あなた　　！」

いま一番目にしたくないものが目の前に現れた。そして浄化できないことを知っていないがらなせ　　こいつはそういう生き

物だ。自分の不利になるようなことは言わない。

「鹿目まどかの力は、想像を絶するものだ。そして、溜め込む呪いもそれ相応のものになる。まどかが僕と契約するとき言った願いを君は知っているかい？」

「知るわけないでしょう!!」

「まどかはボクにこういったんだ『わたしは力がほしい。あの魔女よりも、どの魔女よりも強い力がほしい』とね。それがどう意味するかわかるかい?」

「なにが言いたい?!?」

インキュベーターのいつも通りの態度にイラつき、まどかが危ない状況なのも合わせて自然と声が大きくなる。

「落ち着こうよほむら。……つまりは、まどかはどの魔女よりも強い力 言い換えればすべての魔女を倒す力を望んだんだ。簡単に言ってしまうえば、すべての魔女を倒す力を得、すべての魔女の呪いも背負うことになった、というわけだ」

「そんな……そんなこと……」

「ほむらちゃん……わたしね、自分が魔女になりそうになったら、自分でケリをつけようと思ってたの」

私がインキュベーターの説明を聞いて安心してるとき、私の腕の中にいるまどかが私に向かってそんなことを話し始めた。

「……知っているわ」

「ふふ、そうだね」

そんなことはわかっている。まどかは苦しそうな顔をしながら、楽しそうに私の顔を見つめる。

「それでね、わたしのお願い、聞いてくれる……?」

「っ、いやよ」

お願い、そんなもの考えるまでもなくわかる。まどかが私に何を願うかなんて、私は経験で知っている。

「そんなこと、言わない、でよ、ほむらちゃん」

「いやなものはいやよ……なぜ私があなたの願いを聞かなければいけないのかしら」

今までの私なら、次があると信じてまどかの願いを聞き届けていただろう。

しかし今回はそうはいかない。なぜなら私には次がないからだ。

「わたしね、魔女になりたく、ないんだ。だからほむらちゃん、お願い……私のソウルジェム、を、壊してほしいの」

言いながらソウルジェムを私に差し出してくる。やめて、やめてほしい。

「お願い、ほむらちゃん。ソウルジェムを」

「いやよっ！ だってまどかが死んでしまったら私は　　っ」

もうまどかに会えなくなってしまうじゃない！

その言葉が出る前に、まどかを強く抱きしめる。まどかは私の行動に戸惑っているようだが、そんな関係ない。私は絶対まどかのソウルジェムを壊したりなんかしない。

最後はまどかと一緒の場所で死にたい。病室で一人寂しく魔女になるなんてごめんだ。

そんな考えが思い浮かび、なんて自分は最低なんだと心の底から思った。

まどかは私のため、みんなのため自らの命を捧げたというのに、私といえば、散々人を殺してきたのに、死ぬのを怖がり、いざ死は避けられないと知った途端、まどかのお願ひも聞き入れずにこうやって抱きしめている。なんて自分勝手なのだろう。そんな自分に対して思わず笑ってしまいそうだ。

まどかはそんな私を見て笑うだろうか……いや、笑わないだろう。

「　　ひとつ、ボクに提案がある」

私に説明をしたきり、ただずっと私たちを見ていたインキュベーターが突然そんなことを言った。

## 5 (後書き)

ちよつと無理やりすぎたかも。

「いや、提案というよりボクと契約してほしいことがあるんだ」

「……………インキュベーター、あなた今この状況をわかって言っているの……………!？」

「あたりまえさ。むしろ君にとって得なことだと思っただけれど、  
暁美ほむら」

私の目の前には瀕死のまどかが、少し離れた場所には満身創痍の美樹さやかたちが倒れている。そして立っでいられるが私も限界に近い。この誰が見てもどうしようもない状況で契約を持ち出すインキュベーターを問い詰めたが、インキュベーターの返答はいつも通り。いつもならそれに腹を立てるのだと思うのだが、いまは何も思わない。私が死ぬまで黙っていてほしい、そんなことを思う。

「あなたと契約するつもりなどないわ。それに知っているんでしょ  
う？ 私がこの時間軸の人間ではないことを。このあと結局私は戻  
ってしまう……………どうでもいいことよ。それに私は一度あなたと契約  
している。再度契約なんてできるわけないでしょう。それはあなた  
が一番わかっているのではないの？」

そもそも土台無理な話だ。魔法少女は奇跡を対価にしてなるもの。  
そしてその契約は一度きりだ。再度契約なんてできるはずがない。

もし何かしらの方法で契約ができたとしても、私は結局この場で  
死ぬかあの病室で魔女になるしか道が残されていない。私に得があ  
ると言っても、ワルプルギスの夜を倒せるほどの力は手に入れるこ  
とはできないだろう。

そして、これは私の憶測 いや、確信しているが、インキュベ  
ーターは私の正体を知っている。今回、私はまどかにも誰にも私の  
力の正体話していない。それにインキュベーターにも感づかれる  
ような力の使い方はしていないはずだ。それなのに、ところどころ  
私の力を知っているような言動や行動が見られた。どうやってイン

キュベーターが知ったのか知らないが、私に契約を持ち出すなんて意味の無いことだと本人が一番わかっているのだと思うのだが。

「……そうさ、？時間旅行者？曉美ほむら。君はなぜボクが知っているの疑問なんだろうけど、ボクと契約してくれるというなら教えよう。そして君は再度契約できないと言ったけれど、それは魔法少女になるための契約だ。契約自体は何度でもできる。ただボクたちが新たな契約をするに値するときにしかその話はしないけどね」

「それがなに？ 私はあなたとは契約はしないと云っているでしょう。さつさと消えなさい」

「……ボクと契約すればまどかが救えるとしてもかい？」

「……なに？」

インキュベーターはそんなことを言う。私は繰り返してきた時間の中で、何度もインキュベーターにまどかを救う手段はないのかと問い詰めてきた。そして帰ってきた返事はいつも同じ、そんな手段は無い、できないというものだった。

「ほむらがボクと契約すればまどかが救えるんだよ。どうだい？」

聞く気になったかい？」

「ふざけないで。もうまどかは救えないわ。あなたは嘘までついて私に契約してほしいらしいけど、私がそんなものにかかるわけがないわ」

それがいま、インキュベーターはまどかを救えると言っている。いままでインキュベーター自身がまどかを救えないと言ってきたのだ。それがいまさらまどかを救えると言っても、信じる信じない以前に破たんしている。

「……そうだね。君はいままでボクにまどかを救えないと言われてきたんだっただね。できないと思うのも仕方ない。そうだな、ほむら、どうしていままでボクが君にまどかを救うことができないと言っていたかその理由がわかるかい？」

「そんなの、できないからでしょう」

「違うんだほむら。鹿目まどかを救うことはできた。ただ、救う意

味がなかっただけさ」

「意味がなかった？」

「そう。ほむらはどうして僕が少女と契約するか、その意味を知っているよね？」

「感情のエネルギーを集めるためでしょう」

「そうだ。多感な時期の少女と契約して喜怒哀楽、様々な感情をエネルギーしてもらい、不確定要素の塊である感情というものを解明するのがボクたちインキュベーターの目的だからさ」

インキュベーターには感情がない。もともとこいつらの種族には感情をもったものはいないらしい。いつの間だったか、インキュベーターが言っていた。そして感情というものを解明するために少女と契約して感情のエネルギーを得るのだという。

「それで、それがまどかを救うというのとどこが関係していたのかしら」

「ほむら、感情のエネルギーを手っ取り早く集めることができるのは、魔法少女が魔女に変わる瞬間なんだ。そしてまどかはすさまじい力を持つ魔法少女で、魔女だ。ということはエネルギーも相当なものになる」

それは私が一番わかっている。まどかは魔女になる、それだけで一つの星が滅びてしまう力を持っている。

「まどかが魔女になるだけで、解明に必要なエネルギーを十分補うことができる。だから魔女にする理由はあれど、救う理由はなかった」

「なら今回も変わらないじゃない。よかったわね、まどかのエネルギーがとれて。そしてこれからは邪魔をする私もいなくなる。……疲れたわ。消えなさい」

一瞬、耳を傾けた私が愚かだった。まどかが魔女になりこの星は滅びる。インキュベーターには地球はただの使い捨ての道具に過ぎない。それはわかっていたはずだ。

「ボクの話を書いてくれほむら。ボクは意味がなかったと言ったん

だ。だけど、いまはまどかを救う意味がある」

「……続けなさい」

「ボクはすでにエネルギーを相当量獲得しているんだよ　ほ  
むら、君のおかげだね。そしてこれからのボクたちの計画にはまど  
かが必要になる」

## 6 (後書き)

なんか中途半端なところで切れてるけど勘弁。

まだかマギカ最終話が放送されてもう一か月もたってますが、この話の内容を考えたのは最終話放送前です。そのためおかしなところがあるとおもいます。すいません。

遅筆万歳！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4300s/>

---

こんな終わり方も、あってもいいよね。

2011年11月16日22時36分発行